

リードカナリーグラスの耕種的抑圧法の検討（第一報）

○三角亮太・黒柳智樹¹⁾

(熊本農研セ草地畜産・¹⁾熊本県畜産課)

【目的】

イネ科牧草の一つであるリードカナリーグラス(RCG)は、気候や土壌などに対する適応性が高く、永続利用が可能であるなどの点からロールベール・ラップサイレージとしての利用性が高い。しかし、寒地型牧草との混播草地においては、地下茎により面的に増殖し他の植生を被圧することや出穂後に茎部の木質化が進み放牧時の嗜好性が低下すること、冬枯れを起こすことなどの点から、混播草地としての維持管理が困難で冬季放牧利用を妨げる要因となっている。また、選択的除草剤による抑圧が難しい状況であるため、混播草地で利用する場合にはRCGの抑圧が必要と考えられる。

そこで、耕種的手法(放牧)による抑圧技術の検討を行った。

【材料および方法】

2006年4月17日から2006年10月18日の184日間褐毛和種繁殖牛2頭、黒毛和種繁殖牛1頭の計3頭(入牧時平均体重548kg)を用い、当所RCG優占草地(1ha)への定置放牧を実施した。

入牧前の3月25日に窒素成分42kg/haでN:P₂O₅:K₂O=14:14:11を施用した。

調査項目は草丈、収量および体重とした。

【結果および考察】

(1) 入牧時のRCG被度は36.0%、放牧期間中の10a当たり風乾物収量は1300kg、一日一頭当たりの推定採食量は21.9kgであった。退牧時のRCG被度は16.4%となりRCG被度の低下が認められた。また期間中の牧養力は670.5CD/haに達した。(表1)

(2) 放牧期間中におけるRCGの日伸長量の推移を調査したところ、4~6月が最も優れ1.5cm/日を上回った。その後、7月にかけて急速に低下したが、9月はやや回復が見られた。草地生産量は5~6月が最も優れ、430kg/10aとなった。その後、9月にかけて生産量は減少した。(図1)

(3) 退牧時の平均体重は643kgと増加した。(図2)

以上の結果、放牧によってRCGは抑圧されたが、RCGの生育初期は嗜好性も良く、放牧草種としての利用性は高いことが考えられた。

しかし、冬季放牧利用を考える上では課題があるため、今後RCG優占草地への簡易更新法によるオーチャードグラス、トールフェスクなどの優良牧草の植生維持について検討していきたい。

表1 リードカナリーグラス優占草地における放牧実績

放牧期間	放牧日数	入牧時	退牧時	放牧期間中の風乾物収量(kg/10a)	放牧期間中の平均採食量(ADMkg/頭・日)	利用率(%)	体重500kg換算延べ放牧頭数(頭)	牧養力(CD/ha)
		RCG被度(%)	RCG被度(%)					
H18.4.17 ~10.18	184	36.0	16.4	1300.6	21.9	95.1	670.5	670.5

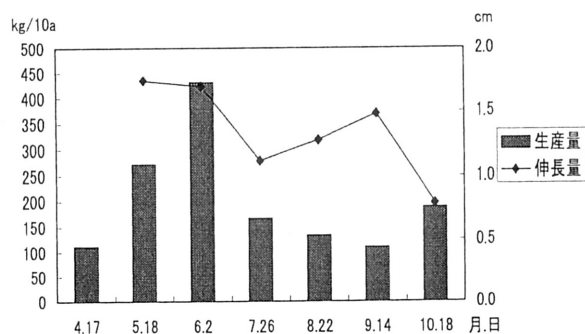


図1 放牧期間中における日伸長量と草地生産量の推移

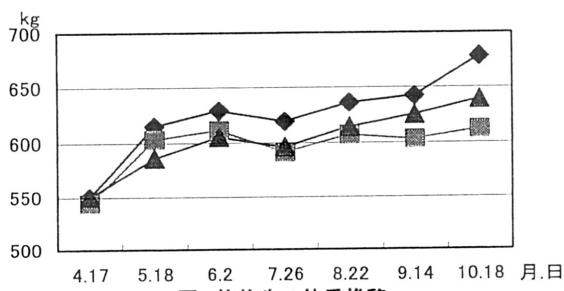


図2 放牧牛の体重推移